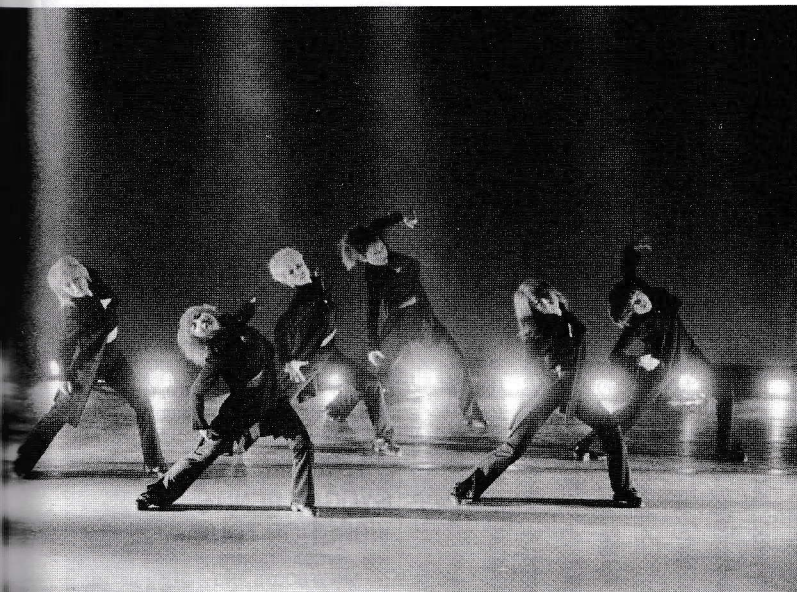


AMUSEMENT  
SQUARE  
stage



撮影/中村邦雄

9月15日18時45分、ボクは公会堂文化ホールにいた。DANCE WAG Live "MUSIC"。開演15分前だというのにそこは満席立見状態で、中央通路や上手寄りの手摺りに寄り掛かりつつ開演時間を待つ。

そもそもWAGのダンスをカテゴライズするのなら何なのか？今では恥ずかしい呼称だが、やはり「JAZZ DANCE」なのか？「ぢやずだんす」と言われれば、深夜の消費者金融のCMで、いきなりレオタード姿のオネエさんが踊り出すアレを連想しちゃう。うーむ、そーなるのかなア？。

定時に本ベルが鳴る。ゆっくり

と客電が落ち、刻まれる音楽。綴帳が上がり、モノトーンの灯りの中に滑り込むように踊り出す6人のダンサー達。だが、「キャーキャー、〇〇さーさーん」黄色い歓声と手拍子。ここからここからここからここからここからここから、いつからWAGは宝塚になっちゃったんだ？お客さん、少しはダンサーのことも考えてやんなさい。マナー最低。

それはさておき、舞台上のダンスなのだが、む、やや動きに切れがない。不吉な言葉を思い出す。「ウチ等も年だからさー」

昼過ぎに楽屋見舞いに訪れたとき主宰沼尾美也子の口からこぼれた

台詞。6人のメンバーのうち一人をのぞいた全員が30代に突入している。体力的にもピークは過ぎていくに違いない。80分のステージを、たった6人で踊り通すことが出来るのか？

しかしそれは懸念に終わった。プログラムが進むにつれ、舞台上の空気が明らかに変わり始める。

その手がその足が、空間を切り裂き舞台を踏み締める。無限の距離を引き寄せ、かき抱くように、突き放すかのように、踊り続ける6人。伸ばした指が掌が、包み込むように、慈しむように、時間を抱き締める。それをカテゴライズするならば、紛れもない「WAGのダンス」だ。

6人のメンバーは利那たりとも一点に留まらない。観客は無駄な手拍子など忘れ、ダンスに飲み込まれる。満員のホールなのに不思議と熱気を感じられない。観客の視線が、ステージ上のダンスを触媒として、一瞬にして昇華されているかのよう。その際の気化熱でステージは汗を渡る。そうか、WAGのLiveが「Cool」なのはこれだからか。プログラムが終わる度に観客は我に返り、熱い喝采を送る。「Hot」と「Cool」、緩急の繰り返し。それがWAGのLiveなんだ。

所要所の転換に散りばめられたVTR、モノクロのレッスン風景に被せてCG処理されたテロップ。WAG恒例の小意気な演出。

11月のFriday Amusement Negative Shop

■11月2日 (404回) 安達良春プラスワンシアター

■11月9日 (405回) 未定

■11月16日 (406回) 未定

■11月23日 (407回) 未定

■11月30日 (408回) 未定

※全て午後7時30分～、料金500円 チケットはスペースベンにて販売

Space BEN

駐車場はございませんので、車のご来場はご遠慮下さい。(近くに西町書店駐車場有り)

☎ スペースベン 八戸市柏崎1-11-8 ☎&FAX 43-9876

※スペースベンの上演内容は、ホームページまたはメールマガジンでご確認下さい。

FANSでは、脚本を広く募集しています。何か表現したくても踏み出せないあなた、一度「物語」を書いてみませんか？ FANSでは、そんな方の思いを大切に舞台にのせてみたいと思っております。

WAGの本領発揮(?)とも言える「赤ジャージ」の老婆ダンス。コミカルなダンスの中にも冴えた動き。このあたりからメンバーは自分たちの踊りを楽しみ始めたように感じる。こうなつて来たWAGは恐いもの無し。

沼尾美也子は「金髪」というよりプラチナブロンドにまで脱色された髪を振り乱しステージに立った。やはりその存在感は大きい。振り付けにも大きな変化が観られるように思える。従来の「Beat」で踊られていたダンスとは違う、極めてメロディアスなダンス。円

熟期(?)に入つたメンバーの心境の現れか？ 成程、今回のタイトルが「MUSIC」だった訳だ。

カーテンコールとして踊られたジプシーキングス・ヴァージョン「マイウェイ」。シド・ヴィシャスの唄とは違う「もうアタシたち、踊りしかないもんねエ」なる良質の、潔いまでの開き直りが窺え知れる。

踊り終え勢揃いした6人のメンバー。プラチナブロンドのオヘアに包まれた女神たちは、荒い呼吸を押さえつつ、至福の笑みを浮かべている。

その瞬間、DANCEは澄んだ。

DANCEがすんだ

演劇空間スペースベン

文/しもさき博之